

第9回

ウイキョウ

薬学事務課 嘱託技術員 鈴木 達彦

ウイキョウはヨーロッパの地中海沿岸を原産地とするセリ科の多年生植物で、写真1のように多数の花をまとめて咲かせる。1つ1つの花はととても小さいのであるが、花火を2回はじけさせたように花を並べているため全体としてはとてもよく目立っている。これはセリ科の植物の花によく見られる特徴で、茎を伸ばしてその先を放射状に2回分枝させ多数の小さい花をつける花の配列をとり、複散形花序という。

また、ウイキョウは全草に香りの成分を含んでいて、葉に少し触るだけでも特有なおいがある。セリ、セロリ、ニンジンといった仲間のように精油成分（エッセンシャルオイル）を含むものが多いのもセリ科の植物の特徴の1つである。ウイキョウは中でも果実の部分に精油が多く含まれていて、香辛料として用いられる（写真2）。香辛料としてはフェネルという名で通っているのだから、そちらの方をご存知の方も多いのではないだろうか。カレー粉にも入れられることの多い身近な香辛料である。

生薬としても香辛料と同じように果実を用いており、漢方では茴香ういきょう、あるいは小茴香しょうういきょうといい、成分はアネオール等の精油、その他モノテルペンなどを含んでいて、健胃、去痰、くふう駆風作用などが知られている。ウイキョウは漢方の胃腸薬に配合されることが多いが、漢方の歴史からすると比較的後になって登場する生薬といえる。というのも、中国の伝統医学はもともと健胃薬の概念自体が希薄であるといえ、3世紀ごろ著された主要な原典であ



写真1 ウイキョウ



写真2 果実の部分に精油が多く含まれている

る『傷寒論しょうかんろん』には、いわゆる健胃薬の処方はいずれも記載されない。ウイキョウのような芳香性の生薬を、消化を助け、腹部の膨満感を除く胃腸薬として用いるのは、インドやアラブ、ヨーロッパの伝統医学が得意とするところで、中国にはシルクロードを介した東西交易によってこれらの生薬とともに胃腸薬の概念も導入された。そして、北宋代の12世紀に編纂された『和剤局方わざいきょくほう』という処方集に多くの西域由来の処方が記載されるようになったのである。そのため、安中散あんちゅうさんや平胃散へいいさんなどの胃腸薬の代表的な漢方処方『和剤局方』に由来するものが多い。

現在市販されている漢方薬を含んだ胃腸薬もこうした芳香性健胃薬が中心であるので、ウイキョウをたよりにパッケージの裏を見ていただくと、東西の伝統医学の合作ともいえる処方を容易に探し当てることができるであろう。